令和５年 12 月 16 日

西大寺を愛する会　令和５年 12 月度例会発表

西大寺八幡山城と宇喜多氏・・・宇喜多直家出世城 中間報告

西大寺を愛する会　丸谷憲二

1　はじめに

「西大寺と宇喜多氏」に最初に注目したのは、沼田頼輔氏（西大寺高等女学校初代校長）です。西大寺八幡山城の初見は、享保２年（1717）**『陰徳太平記』**の「浦上宗景並宇喜多直家事」の「**西大寺の八幡山には、忠家を処（お）きてけり**」です。『隠徳太平記』は戦国時代の山陰、山陽を中心に、室町時代 12 代将軍足利義稙（あしかが よしたね）の時代から慶長の役まで（1507～1598）の軍記物語です。その中に**西大寺八幡山城が記録**されているのです。伊原仙太郎氏は『西大寺町誌』に「**山の頂上に宇喜多直家が八幡山城を築いて、叔父の忠家に守らせていた。**」と報告しています。

備前国の軍記物語は『隠徳太平記』と**『備前軍記』に代表され、『備前軍記』に西大寺八幡山城の記録がありません。**両書とも口語訳が山陽新聞社より出版されています。

備前八幡山城主の記録を『信長公記』で発見しました。**戦国覇者の一級史料に備前八幡山城が記録されていました。信長 45 歳の記録**です。**池田家文庫本の「信長記」は、国指定重要文化財です。**しかし、岡山市の観光化構想、**宇喜多築城物語に、西大寺の八幡山城が見えません。**場所は岡山学芸館高校のある金山です。説明版がありません。先行研究者は沼田頼輔、伊原仙太郎、三好基之、池上惇之、出宮徳尚、植木成行、伊達教夫氏のようです。

2　山陽新報『西大寺と宇喜多氏』雀洞（沼田頼輔）

雀洞（沼田頼輔・西大寺高等女学校初代校長）が岡山県初の新聞、山陽新報に「西大寺と宇喜多氏」を寄稿し、明治 43 年（1910）２月９日～14 日迄５回連載されました。

宇喜多直家肖像

西大寺と宇喜田氏（其四）　雀洞

池上惇之氏が、岡山県立図書館蔵のマイクロフィルムから山陽新報・明治 43 年の記事を発見し『西大寺と宇喜多氏』を纏めたのは平成９年（1997）です。**備前西大寺は単一寺**

院ではなくて、成光寺や清平寺などを含む一山寺院でした。明応５年(1496)の縁起「明応五年備前国金岡県西大寺化縁疏并序」は清平寺の縁起です。

宗景は其の功を賞して更に三千石の地を賜はり、以つてその軍功を勵ましたのである、西大寺の八幡山城（今の金山山上に八幡神社があるので八幡山と呼んだのである、當時は金岡と稱し、金岡の出名もこれから起つたのであるとは平賀元義の説である）の築かれたもこの頃であつた、さうしてこれは直家が築いたことと思はれる、西大寺所藏文書に、次の如き文書がある。

當城普請之儀、本村百姓中に申付候處、御家來中へ申懸候由、言語同斷曲事に候、御寺之儀者自先父之諸公事高除之儀候條、一切被仰付間敷候、於向後も百姓猥成儀申懸候共、以此旨不可承引候、

弘治三　二月四日　宇喜多三郎右衛門尉　直家（花押）

清平寺（當寺の西大寺別當職）

人々御中

右の文書に當城とあるのは、如何なる城を指したのであるかといふに、當城ともあれば彼の居城であつたには相違ないが、トコロが乙子城は天文十三年の築城であるから、弘治四年にこれを改造する必要もなからうと思ふ、又、砥石城には此頃島村貫阿彌が居り、沼の城（上道郡浮田大字沼）には直家の舅の中山備中が居つたのであるから、直家の屬城として築造すべきは乙子城の外この八幡山城でなければならないのである。

ソコで思ふに、直家が乙子城に居つて、三千石を領したとすれば、此の西大寺も亦その領地に屬して居つたことと思はれる、乙子より南の辛島地方は、池田家の時代に開墾したものであつて、此頃田地はなかつたのである、又、乙子より東及北に當る方面は砥石城の浮田大和高取城の島村豐後などが分領して居つたのであるから、若し川を越えて上道郡に彼が領地を所有して居つたとすれば、是非ともこの八幡山に城を構へて、この方面を防禦する必要がある、直家が前掲の下知状を西大寺に下して賦役を免除するのを見ても、當時

慥かにこの地方が直家に勢力範圍であつたことが知らるるのである。

この點から考へると、右の文書に當城とあるのは、恐らくは八幡山城ではあるまいか、この八幡山城は今に西大寺高等女學校のある丘陵で、今も八幡社の西北林叢の中に乙子や砥石の城趾にて見るやうな段丘が幾個も殘つて居る、この城は沼城と南北相應じて東備に備へたる要塞であつて、天正年間直家が沼城より岡山に移つた後は、弟の忠家をこの八幡山城に置き、その弟の春家を沼城に置いて、さうして東面の防備に任じたのである、其の証拠には、陰徳太平記巻五十三に次の如く記されてある。

（上畧）如此て岡山の城には己遷り居て沼城には舍弟春家を置き西大寺の八幡山には忠家を處てけり（下畧）

3　西大寺八幡山城（金山）の初見・『陰徳太平記』の活字化　大正２年（1913）

八幡山城（金山）の初見は享保２年（1717）の『陰徳太平記』の「浦上宗景並宇喜多直家事」の「**西大寺の八幡山には、忠家を処（お）きてけり**」です。著者は香川景継（梅月堂宣阿）です。全81巻と「陰徳記序および目録」１冊からなり、戦国時代の山陰、山陽を中心に、室町時代12代将軍足利義稙の時代から、慶長の役まで（1507～1598）までの約90年間）、藩主吉川氏と宗家毛利氏からの視点での軍記物語です。正徳２年（1712）には版木完成とされています。

び寄せ、直家にぞ討たせられける、直家、歡阿彌を討ちて、多年の讐を復し、舊領を奪返し、程なく中山を誅して、自ら沼の城に移居しけり、直家其身文通じ武達して、往々に軍功を建てたりければ、浦上甚だ感賞して、食邑なども年を逐うて加增しける間、後は富饒却つて浦上が右に出で、權威赫々と盛んなり、さる故一家中の士庶人等、皆直家が機嫌に違はじと譽誤崇敬す、直家、宗景の弟政宗と不和也ければ、頓て政宗、岡山の城主金光宗高と心を合せ、謀反を企つる由を譏しける間、宗景大きに怒つて、直家に政宗、宗高兩人を討たん事を命ぜらる、或時政宗岡山に赴き、鷹狩して在りけるを、直家隙を闘ひ夜中に岡山へ押し寄せ、宗高、政宗二人を討ちてけり、如此て岡山の城には、己れ遷居て、沼の城には、舍弟春家を置き、西大寺の八幡山には、忠家を處きてけり、さて年月を逐ひ軍兵衆く附從ひける程に、備中國の伊賀左衛門を聟に取りて、後毒殺して遂に備中國を切り取りけり、夫より作州を領せんと思ひけるに、後藤美作守高光、同國海老の城に在りて、至剛にして輙く討ち難く覺えければ、姉を以て彼に嫁す、（一曰以彼娘自妻之）他日毒殺しける間、作州の諸士多くは味方に降りけり、是に於て上山の城には、延原彈正少弼を置き、荒神山に花房

『通俗日本全史　十四巻　陰徳太平記下　巻第53』香川宣阿　早稲田大学編集部　大正２年（1913）　p194

4　大正 11 年（1922）『上道郡誌』

大正 11 年（1922）『上道郡誌』の金山の説明に「**陰徳太平記所載の西大寺八幡山城はこの地なり。**」と。

5　備前八幡山城主の記録が『信長公記』に

備前八幡山城主の記録を『信長公記』で発見しました。織田信長の生涯を描いた一代記「信長公記」は、信長の家臣太田和泉守牛一が、実際に見聞きした信長の記録をもとに執筆したものです。戦国覇者の一級史料に**備前八幡山が記録されていました。**巻 11（天正六年戊寅・ 1578）太田和泉守これを綴る「洪水の事」。**信長 45 歳の記録**です。

うにと命じたところ、佐久間信盛、滝川一益、蜂屋頼隆、明智光秀が申し上げるには、播磨の敵陣は地形が険しく、難所に遮られた地に要害を丈夫に構えて居陣していると聞き及んでいますので、我らが出向き、敵地の状況を見分して報告します。それまでは出陣を猶予下さるようにと、一同が口を揃えて意見を申し上げた。戊寅四月二十九日、滝川一益、明智光秀、丹羽長秀が播磨へ向けて出陣した。

戊寅五月一日、織田信忠、織田信雄卿、織田信包、織田信孝、細川藤孝、佐久間信盛が、尾張、美濃、伊勢三箇国の軍勢を率いて出馬した。その日は郡山に泊まった。翌日は兵庫、六日には播磨国明石の隣郷、大窪という在所に陣を据えた。先陣は敵城神吉、志方、高砂に対峙し、加古川近辺に野陣を掛けた。

〔注記〕

20 東西の関所の門…織田氏と毛利氏との国境を確定する意。

五月十三日、信長公は出陣する旨の命を発したが、十一日巳の刻から雨が激しく降り、十三日午の刻まで夜日五日[21]にわたって雨が激しく降り続き、洪水が大量に溢れ出し、加茂川、白川、桂川が辺り一面に氾濫した。都の小路という小路において、十二、十三日の両日には一つの川となって流れ、上京の船橋の町は押し流された。水に溺れ、人が大勢怪我をし死んだ。村井貞勝が新設した四条の橋が流失した。このように洪水ではあるけれども、これまで信長公が出陣すると言えば、日取り日限を変更したことがないので、船を用いて出動するに違いなかろうと察し、淀、鳥羽、宇治、槇島、山崎の者たちが、数百艘の船を三条油小路ま[22]で艪と櫂を立てて集結した。この状況を言上すると、信長公は御機嫌良く満足げであった。

五月二十四日、竹中重治が言上した子細であるが、備前国中の八幡山の城主が味方になった旨を報告した。信長公は満足の意を表し、羽柴秀吉に対して黄金百枚、そして竹中重治に銀子百両が下賜された。感謝申し上げて重治は帰って行った。

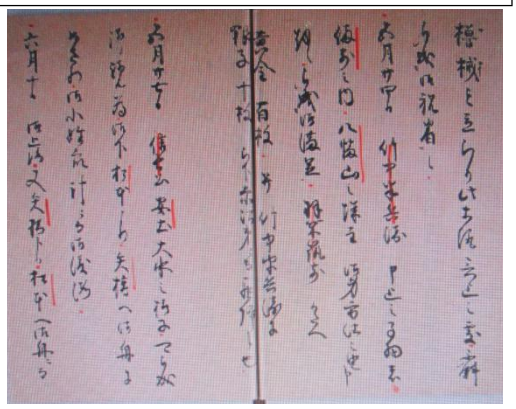
戊寅五月二十七日、信長公は安土における大水の被害状況を視察するために下向した。松本から矢橋へ船を用い、小姓衆だけを供に連れて琵琶湖を渡った。

戊寅六月十日、信長公は上洛の途に就き、下りと同じく矢橋から船を使って松本へ上がった。

戊寅六月十四日、祇園会が催され[23]、信長公は見物した。馬廻衆、小姓衆いずれも弓、鎗、長刀の持道具は無用であると命じたので、携行しなかった。祭見物の後、警護の御供衆を帰し、小姓衆を十人ほど連れて、直ちに鷹野へ出掛けた。雨が少し降った。その日は、近衛前久殿へ、知行都合千五百石を山城国普賢寺において進呈した。

戊寅六月十六日、羽柴秀吉が播磨から参上し、信長公から一つ一つ事細かく指示を受けた。そして策略が機能せず陣を張っていても埒が明かないので、ひとまずいまの陣を引き払い[24]、神吉、志方へ押し寄せ攻め破り、そのうえで、三木の別所長治の構えを攻め立てるのがいいと指示した。神吉の城攻めの検使として、大津長昌、水野九蔵、大塚又一郎、長谷川秀一、矢部家定、菅谷長頼、万見重元、祝重正に、番代わりで付くよう指示し、六月二十一日、信長公は京都から安土に下向した。

天正六年（1578）「**5 月 24 日、竹中重治が言上した子細であるが、備前国中の八幡山の城主が味方になった旨を報告した。信長公は満足の意を表し、羽柴秀吉に対して黄金 100 枚、そして竹中重治に銀子百両が下賜された。感謝申し上げて重治は帰って行った。**」



『信長公記』は信長研究の基本史料で、一次史料に準ずる史料です。著者の太田牛一は信長の直臣です。太田牛一の『信長記』は明治になって初めて刊行されました。**太田牛一の自筆本に池田家文庫所蔵『信長記』（池田本）**があります。

岡山大学付属図書館古文献ギャラリーの説明

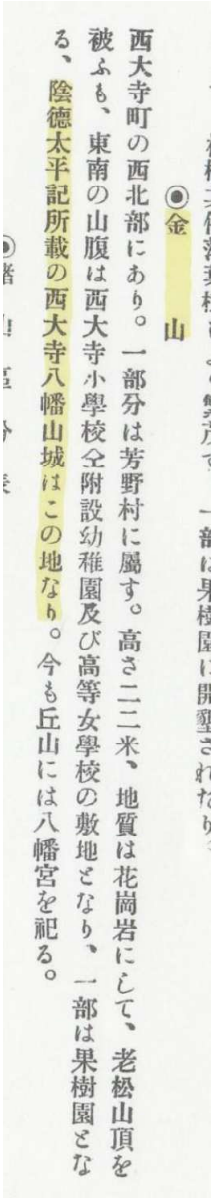
『信長記』・・・国指定重要文化財。

信長の家臣であった太田牛一による、信長の伝記。

15 巻。永禄 11 年(1568)前後の信長上洛の経緯から、本能寺の変で亡くなる天正 10 年(1582)まで 1 年 1 巻で記述されている。池田家文庫本の「信長記」は、太田牛一本人の筆による（巻 12 のみ写本）ものであり、かつ現在に伝わる信長記諸本のうち最も古いものと考えられる一本である。池田輝政が信長記を求めたとされており、輝政自身の登場部分に一文付け加えさせている（巻 13）。著者自筆かつ池田家仕様という他に例のない信長記である。『訳注 信長公記』太田牛一　武蔵野書院　2018 年を確認しました。

5.1　直家と織田信長との和睦　天正 7 年（1579）、昭和 46 年『西大寺町誌』に

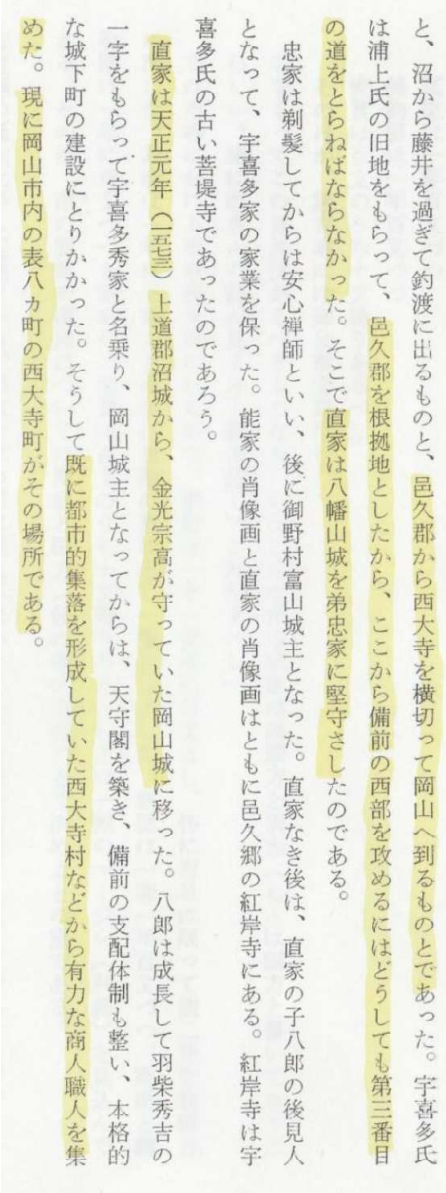
伊原仙太郎氏は、昭和 46 年（1971）の『西大寺町誌』p29 に「こうして**天正 7 年（1579）には直家は羽柴秀吉の斡旋によって、甥の基家を使いとして織田信長の嫡子信忠へ送り、信長へ忠誠を誓った。**」とあります。**天正 7 年（1579）は校正ミスか。『信長公記』からの創作でしょうか。参考文献名がわかりません。**



◉金　山

西大寺町の西北部にあり。一部分は芳野村に屬す。高さ二二米、地質は花崗岩にして、老松山頂を被ふも、東南の山腹は西大寺小學校仝附設幼稚園及び高等女學校の敷地となり、一部は果樹園となる、陰徳太平記所載の西大寺八幡山城はこの地なり。今も丘山には八幡宮を祀る。

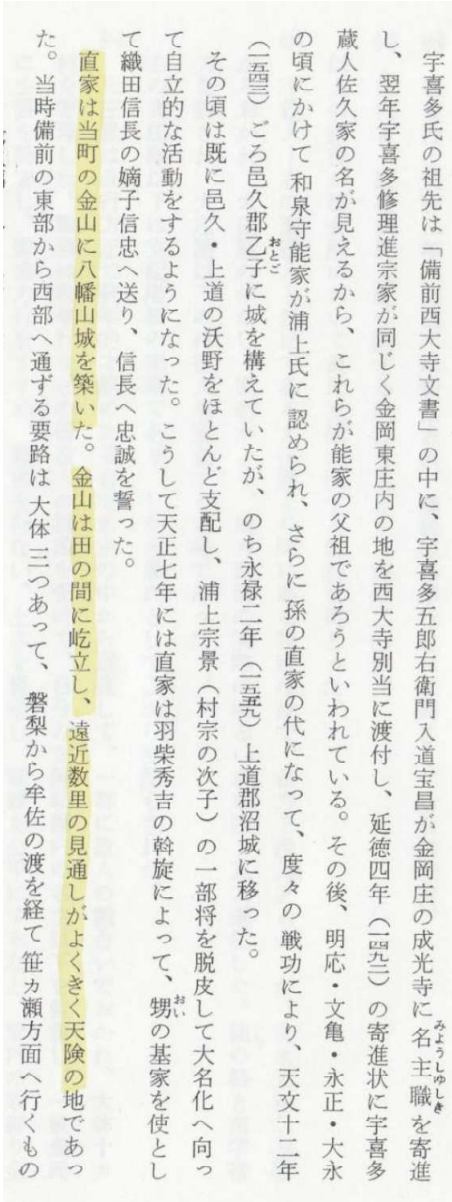
『上道郡誌』



と、沼から藤井を過ぎて釣渡に出るものと、邑久郡から西大寺を横切って岡山へ到るものとであった。宇喜多氏は浦上氏の旧地をもらって、邑久郡を根拠地としたから、ここから備前の西部を攻めるにはどうしても第三番目の道をとらねばならなかった。そこで直家は八幡山城を弟忠家に堅守さしたのである。

忠家は剃髪してからは安心禅師といい、後に御野村富山城主となった。直家なき後は、直家の子八郎の後見人となって、宇喜多家の家業を保った。能家の肖像画と直家の肖像画はともに邑久郷の紅岸寺にある。紅岸寺は宇喜多氏の古い菩提寺であったのであろう。

直家は天正元年（一五七三）上道郡沼城から、金光宗高が守っていた岡山城に移った。八郎は成長して羽柴秀吉の一字をもらって宇喜多秀家と名乗り、岡山城主となってからは、天守閣を築き、備前の支配体制も整い、本格的な城下町の建設にとりかかった。そうして既に都市的集落を形成していた西大寺村などから有力な商人職人を集めた。現に岡山市内の表八ヵ町の西大寺町がその場所である。



宇喜多氏の祖先は「備前西大寺文書」の中に、宇喜多五郎右衛門入道宝昌が金岡庄の成光寺に名主職（みょうしゅしき）を寄進し、翌年宇喜多修理進宗家が同じく金岡東庄内の地を西大寺別当に渡付し、延徳四年（一四九二）の寄進状に宇喜多蔵人佐久家の名が見えるから、これらが能家の父祖であろうといわれている。その後、明応・文亀・永正・大永の頃にかけて和泉守能家が浦上氏に認められ、さらに孫の直家の代になって、度々の戦功により、天文十二年（一五四三）ごろ邑久郡乙子（おとご）に城を構えていたが、のち永禄二年（一五五九）上道郡沼城に移った。

その頃は既に邑久・上道の沃野をほとんど支配し、浦上宗景（村宗の次子）の一部将を脱皮して大名化へ向って自立的な活動をするようになった。こうして天正七年には直家は羽柴秀吉の斡旋によって、甥（おい）の基家を使として織田信長の嫡子信忠へ送り、信長へ忠誠を誓った。

直家は当町の金山に八幡山城を築いた。金山は田の間に屹立し、遠近数里の見通しがよくきく天険の地であった。当時備前の東部から西部へ通ずる要路は大体三つあって、磐梨から牟佐の渡を経て笹ヵ瀬方面へ行くもの

『西大寺町誌』

6　『西大寺の城跡』西大寺愛郷会　昭和 49 年(1974)

最後に金山八幡山城（金山）を紹介しています。「宇喜多直家が乙子城主となり、やがて奈良部、沼城へ入ってからは、**ここが西進への重要な基地となった。邑久郡から西大寺を経て、岡山へ入る道。乙子城からよりも、もっと近距離のこの山を、前進基地として重要視して、築城し、弟忠家を居らしめた。**」と。**「陰徳太平記」巻五三を紹介**しています。

十八　金山八幡山城（金山）

金山（標高二二m六）は、もとは東南西に裾を引き、その周辺は沼や蓮池やまこも池などで、その外側は田畑となり、遠く数里の見通しがきき、天険の地であった。

宇喜多直家が乙子城主となり、やがて奈良部、沼城へと入ってからは、ここが西進への重要な基地となった。

当時、東備前から西備前へ通ずる要路が三つあった。

① 槃梨から牟佐渡しを経て、笹ケ瀬方面に向う道

② 沼から藤井を経て、釣の渡しに出る道

③ 邑久郡から西大寺を経て、岡山へ入る道

直家は後者の二道を利用して、西備前へ進出を考えた。そのためには、乙子城からよりも、もっと近距離のこの山を、前進基地として重要視して、築城し、弟忠家を居らしめた。

江戸時代の正徳二年（一七一二）、香川正矩著（防南、今の山口県南部の人）「陰徳太平記」巻五十三は「直家は……如此て岡山の城には己れ遷り居て、沼城には舎弟春家を置き、西大寺の八幡山には忠家を処てけり……」と記している。

金山城と名付けず、八幡山城と称したのは、平安朝の康保年間（九六四―九六八）に、ここに金山八幡宮が勧請されたと伝えられる位だから、築城前にこの八幡宮があったからである。

そうして廃城後、再び同宮が復活したというのが一行の考え方であった。

7 『新釈陰徳太平記』三好基之　山陽新聞社　平成２年（1990）p113

備前国御野郡野殿村（岡山市矢坂本町・同東町）の富山の城主の松田は、代々にわたって剛勇で、浦上則宗と戦火を交えていた。松田蓮昌は津高郡金川（御津郡御津町金川）にいて、備前国を支配していたので、直家は侮りがたく思い、彼に娘を嫁入りさせて時節を待っていた。松田の家臣に宇垣市郎兵衛、同宗右衛門という兄弟の勇者がいた。この二人を討たねば成功しないと思い、金川での鹿狩りに誘ったところ、市郎兵衛は他出中であり、宗右衛門だけが狩場へ出てきたのを、誰の仕業とはわからないように切り殺した。市郎兵衛にも討手を差し向けたが、行方知れずになった。その後、金川の城を夜討ちして、松田一家を滅ぼし、その領地を横領した。富山の城主の富山某をも追い落として、忠家を入城させた。市郎兵衛ものちに忠家に仕えたという。宗景の臣に中山備前守という人がいた。直家の舅で備前の沼の城（岡山市沼）にいた。彼は宗景の命令を軽視したので、宗景は直家に彼を切ることを命じた。直家は、

「舅は父と同じことです。しかしながら、命令に背くわけにはまいりません。そこで、島村歓阿弥は、自分の祖父の敵なので、これを討って旧領を取り返すことができたら本望です。どうか、このことをお許しください。そうしたならば、中山を切りましょう」

と言った。宗景はその望みを容れて、島村を城中に呼び寄せて、直家に討たせた。直家は島村歓阿弥を討って、多年の仇を返し、旧領を奪い返し、ほどなく中山を切って沼の城に入った。直家は文武に秀でて、しばしば軍功を重ねたので、浦上はたいそう称賛して、領地なども年を追って加増したので、のちには浦上よりもかえって富裕になり、権勢はますます盛んになった。そのため、家中の者すべてが、みな直家の機嫌をそこねないようにして敬いへつらった。直家は宗景の弟政宗と不和であったので、

「政宗が岡山の城主金光宗高と心を合わせて謀反を図っている」

と讒言した。宗景は怒って、直家に政宗、宗高両人を討つよう命じた。直家はあるとき、政宗が岡山に出かけていき鷹狩りをしていたすきを窺い、夜中に岡山に押し寄せ、宗高、政宗二人を討ち取った。こうして、岡山の城には自分が移り、沼の城には舎弟春家を置き、西大寺の八幡山（同市西大寺金山）には忠家を置いた。

『隠徳太平記』巻五十三の「浦上宗景並びに宇喜多直家の事」に「岡山の城には自分が移り、沼の城には舎弟春家を置き、**西大寺の八幡山（同市西大寺金山）には忠家を置いた。」と。**『隠徳太平記』は、戦国時代から安土桃山時代に及ぶ毛利氏の制覇を中心とした戦記です。原本は 281 巻 42 冊、毛利藩の支藩・岩国吉川家の老臣香川正矩が草稿を纏め、次男の景継が完成させました。完成は元禄八年(1695)で刊行は正徳二年(1712)です。三好

基之氏は、解題で「陰徳太平記」の全体は大部なものなので、岡山県関係の記事だけを適宜出して収録した。と。「陰徳太平記」の現代語訳版です。

8　植木成行『宇喜多直家は奸雄にあらず』平成 11 年（1999）

植木成行氏は『宇喜多直家は奸雄にあらず』で、**「直家は西大寺の町の経済力に支えられて戦国大名に成長した」**と明記しています。宇喜多史談会会報第 17 号（平成 18 年 2 月）に、「改訂」『宇喜多直家は奸雄にあらず　直家と浦上政宗・宗景の歴史」を寄稿され、**「一次史料を中心に調べたところ、その結果は通説とは全く違うものであった。」「直家が乙子城・沼城に居た事は全く無い。岡山城に移るまで居たのは西大寺金山にあった八幡山城である。」**と。

宇喜多直家は奸雄にあらず

直家と浦上政宗・宗景の歴史

植木成行

はじめに

一昨年岡山城四百年という事で盛大に行事が行なわれ、宇喜多の歴史が色々語られた。宇喜多氏はその発祥は邑久町であるが、直家の時代には、天正元年（一五七三）岡山城へ移るまでは西大寺を本據としており、西大寺の史上最大の人物である。筆者はここ数年宇喜多の歴史を古文書（一次史料）を中心に調べて見たが、その結果宇喜多の歴史は通説とは全く違ったものであり、直家が奸雄とか梟雄とかいわれる根據となっている「悪行」の数々は、その殆どが全くの事実無根であることが判明した。そこで今「西大寺」誌記念号発行の機会にこれを発表し、郷土の皆様の御批判に供する事とした。

直家の歴史は、浦上政宗・宗景兄弟の歴史と不可分の関係にあり、そこで本稿はこの三者の歴史となる。その期間は享禄四年（一五三〇）の大物崩れの後から、直家の死去の年天正九年（一五八一）までの約五十年間である。

八、直家織田方につく

五月廿四日竹中半兵衛申上ぐるには、備前八幡山城主御味方仕るの由申越したとの事、信長は満足し取りついだ秀吉に黄金百枚、竹中半兵衛に銀子百両を与えた（信長公記）。前年十二月末の上月城の合戦で大敗し、織田方の強さを知り信長方につく事にしたものであろうか。宇喜多を代表して和睦の話の出きるものは忠家以外にない。この八幡山城主は忠家であろう。陰徳太平記には直家が岡山へ移り西大寺八幡山には忠家を置いたとある（巻五十三）。

又沼田頼輔氏（西大寺女学校初代校長、家紋研究の第一人者）は「金山の丘上に八幡祠あり陰徳太平記に記されたる西大寺八幡山城というは即ちこれなり」と述べている（上道郡誌）。

九、宇喜多直家と西大寺

近年戦国大名の城下町の発掘と研究が進みその実体が明らかになっている（日本通史10・11）。それによると戦国大名の城下町は在来の市場町・港町・寺社と、大名の城・家臣の屋敷・直属の商工業者を取り込んだ総構（そうがまえ）の二元構造となっている。大名と家臣の生活物資、城・道路等の建設の土木工事、刀・弓矢・鉄砲・鎧・馬・船等の製造購入等に厖大な人と金が必要であり、このため城下町は必須のものである。以前は戦国大名に城下町などはないという暴論があったそうであるが、今では城下町なくして戦国大名はあり得ないということになっている。しかしこのため新しく城下町を無から建設する力は戦国大名にはまだ無く、在来の市場町・港町の協力を得る事で間に合わすことになった。これが近世大名になると、新しい城下町を無からつくり、城を中心に計画的に家臣屋敷・商工業者居住地・寺社を配置した一元構造になった。

同じ事が言える。新城・沼城それに乙子城にも大きな城下町のあった痕跡は無い。これがあるのは西大寺八幡山城だけである。直家は西大寺の町の経済力に支えられて戦国大名に成長した。

9　出宮徳尚『戦国大名・宇喜多直家の地場からの検証･･･梟雄の再評価･･･』

出宮徳尚氏(岡山城天守閣展示物取扱専門員)の『戦国大名・宇喜多直家の地場からの検証･･･梟雄の再評価･･･』2016 年講演で、**直家一代記たる『備前軍記』を検証**されました。元資料は宇喜多史談会会報に寄稿されています。『宇喜多氏の城々（三)乙子城　乙子城主宇喜多直家考』の「六　領主としての戦功により天文 18 年(1549)に奈良部城主に栄転　**直家は主君から乙子城と所領に加えて旧上道郡奈良部城主に任じられたと記されているが、奈良部城主の所領高と具体的所在地を伝えていない。・・・直家を奈良部城主と記載するのは 19 世紀前半に推定される『東備郡村志』で・・・「奈良邊城　今新庄山と云ふ」と記して直家を城主とし・・・新庄山城の城主を新庄助之進と記載しているものを、わざわざ「一説に新庄助之進と云ふは非なり」と否定している。・・・松本亮之助の、19 世紀前半における奈良部城の判断が、その後に確定事項に見做されて近現代の郡史や市町村史に反復的に踏襲されて、通説となっている。」と。**

出宮徳尚氏は、『備前軍記』を中世の城郭史の立場から考察され、間違いを指摘されました。令和 3 年（2021）1 月　『宇喜多直家物語・明善寺合戦の真相』で、**2 番目の城として、「岡山学芸館高校」のある金山八幡山城に注目され、シーレーンとしての砂川の重要性**を話されました。『宇喜多氏の城々(四)　奈良部城　-その存否の検討-』からの抜粋です。**宇喜多史談会で金山八幡山城に注目したのは植木成行と出宮徳尚氏のみです。**

以上の様に模索の状況要因を析出したうえで、支城とした乙子城との連繋が図れ、部将直家の居城となる城跡を、元西大寺村周辺で模索すると村域の西端に所在する八幡山城跡を適地に提起できる。この城跡は、東西二五〇ｍ、南北一五〇ｍ、標高二一ｍの、沖積地に突出した小低丘陵の金山を城地にし、東側から南側に吉井川下流右岸域の沖積平野が広がり、西大寺の町屋の背後を固めるには恰好の城砦の地をなしている。現況は頂部の大半が削平されて校舎建築地となり、城跡の遺構確認が不可能となっている。この城跡は、前掲の地誌類や軍記物・家伝が全く触れていないが、『陰徳太平記』には「西大寺ノ八幡山ニハ忠家ヲ處ニケリ。」と、直家が亀山城から石山城に移った後のこの城の城主を記載している。萩藩（毛利家）で編纂をみたこの書は、何を根拠にしたかは不明であるが、直家の弟忠家の八幡山城主を史実と認知している。

直家は領地拡大に伴って居城を発展的に移転する場合、元の居城を支城として弟の忠家か春家を城主にしているので、この実績に従えば、八幡山城主を忠家としたことは直家が従前の城主となる。直家の八幡山城主は、乙子城からの栄転後の時期に対応し、前掲の削除改竄を蒙っている時期となる。また、吉備温故秘録は、西大寺村の記載内容に「村内に宇喜多直家の別業跡あり。」と、城跡ではないが直家の元西大寺村内における事跡のあったことを収録している。この記事は、直家事跡の削除改竄の残欠を収録したものと理解できよう。そうであれば、直家の得た恩賞増加地の「西大寺」が、なぜ「奈良何々（奈良原・奈良郡・奈良邊）」に改竄されたかについて、今回は明確な見解を提起できていない。

なお、西大寺八幡山城の直家の居城については、すでに沼田頼輔が明治四三年二月一に日付の山陽新報の「西大寺と宇喜多氏」の連載記事で提起していが、継承発展されることなく今日に至っている。

沼田頼輔の提起は森　俊弘氏にご教示頂いた。深謝します。

10　『備前軍記』　西大寺八幡山城の記録無し

『備前軍記』五巻二冊　土肥経平著の成立は安永三年(1774)です。嘉吉元年（1441）の備前国守護赤松氏滅亡から慶長八年（1603）の池田氏入封に至る約 160 年間を、備前国内で起こった戦乱、および赤松・山名・浦上・松田・宇喜多各氏などの興亡を年月を追って記述しています。活字本は『吉備群書集成第三輯』です。柴田一氏（就実大学元学長)が『新

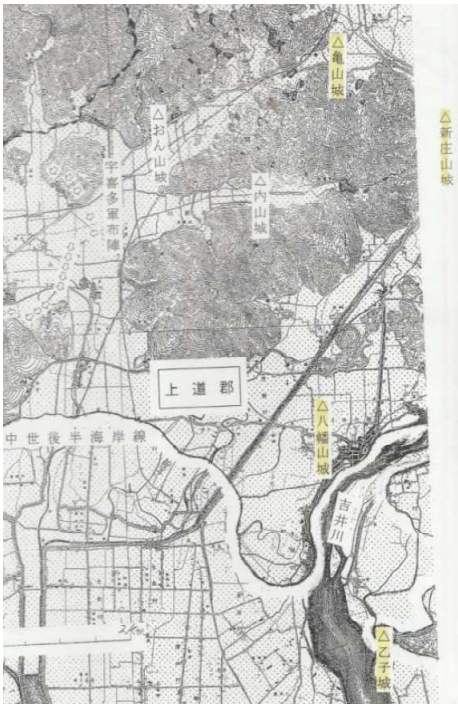
釈 備前軍記』を山陽新聞社 より発刊したのは昭和 61 年（1986)です。**この発刊により備前の歴史が『陰徳太平記』史観から『備前軍記』史観に変わった**ようです。土肥経平は 58 歳から 76 歳迄の 18 年間著作に専念しました。『岡山県誌』などの市町村史の底本となりましたが、**史実と異なる面が指摘**されています。

『現代語訳　備前軍記』は「岡山の戦国時代決定版を令和に改訂！備前国を舞台に繰り広げられた松田、浦上、宇喜多氏の栄枯盛衰がここに―。江戸時代の軍記物語を現代の歴史研究で読み解く。」と PR されていますが、内池英樹氏(岡山県立博物館副館長)は、まえがきに「**すべてが史実ということではない。この点は非常に注意を払う必要がある。・・・その他にも、事実の誤認があるなど、岡山の戦国時代の史実に迫っていくためには課題がある。**」と。「**2002 年に三宅克彦氏が備前軍記の限界を指摘されているが、概ねそのとおりであることは間違いない。**」と。あとがきに「**歴史事実とは異なる内容であったり、･･･特に事実と異なる部分が多いと感じたのは、赤松氏に関する内容である。**」と。
西大寺八幡山城の記録がありません。

11　宇喜多史談会と八幡山城

宇喜多史談会会報の創刊号は,平成 14 年 1 月 30 日です。初代会長は柴田一氏、事務局は菩提寺の光珍寺です。**植木成行氏と出宮徳尚氏以外の八幡山城研究を探しましたが見つかりませんでした。**

12　宇喜多直家と城 - 岡山県ホームページ（pref.okayama.jp）



岡山県ホームページには、**西大寺の八幡山城は記録されていません。西大寺の八幡山城が宇喜多直家出世城であることを知らないのです。**

12.1 浦上宗景の備前支配と宇喜多直家の台頭・・・HP の説明

永禄３（1560）年、尼子晴久が没するとその威勢は弱まり、永禄５（1562）年には毛利氏による出雲侵攻がはじまります。そうした中で、備前東部の支配を確立した浦上宗景は、それまで支援を受けていた毛利氏との確執を深め、永禄６年（1563）には対立していた兄政宗と和平を結びます。そして、毛利氏配下にあった備中松山城（高梁市）の三村家親と各地で交戦し、ついには興禅寺（久米南町）でこれを討ち取りました。

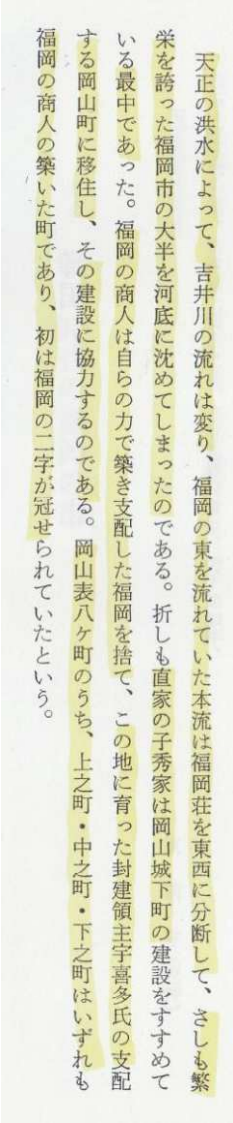
家親を討った宇喜多直家は、宗景に仕えて乙子城（岡山市）を与えられていましたが、この頃には亀山城（岡山市）に入って備前西部の経略にあたっていました。三村家親の嫡男元親が率いる備中勢を明禅寺合戦（岡山市）で破った直家は、永禄 11（1568）

年に姻戚関係を結んでいた金川城（岡山市）の松田氏を滅ぼし、備前西部の盟主としての地位を確かなものとします。

13　戦国時代の福岡の市

『上道町史』に岡崎誠氏は、「能家は福岡に城を営んで拠ったのではなく、食糧・**武器の調達の基地**として利用したものであったし、その後に於ても福岡が合戦の場となったことはない。これは福岡が泉州堺と同じように町衆連の支配する商業都市としての地位を確立しており、武将達の不可侵の地となっていたことを示すものではなかろうか。」と。

「**（福岡）市場は八日市と八丁の間に挟まれた長船町福岡、吉井部落に隣接する一日市と、この両部落の間の吉井川の川底に沈んだ地域を福岡市**と考えて間違いあるまい。」としています。


天正の洪水によって、吉井川の流れは変り、福岡の東を流れていた本流は福岡荘を東西に分断して、さしも繁栄を誇った福岡市の大半を河底に沈めてしまったのである。折しも直家の子秀家は岡山城下町の建設をすすめている最中であった。福岡の商人は自らの力で築き支配した福岡を捨て、この地に育った封建領主宇喜多氏の支配する岡山町に移住し、その建設に協力するのである。岡山表八ケ町のうち、上之町・中之町・下之町はいずれも福岡の商人の築いた町であり、初は福岡の二字が冠せられていたという。

13.1　吉井川の流路変更 天正 19 年(1591)と備前西大寺

「吉井川の主流は八日市・福岡八丁の東を流れていたのであり、**東西に分断されたのは天正（1573～1592 年）の大洪水以後のことである**」と『上道町史』P78 にあり、**吉井川の流路変更は天正 19 年(1591)説**があります。**天正 19 年（1591）長船町天王原の堤が約 690m 決壊し長船鍛冶離散とあります。『西大寺町誌』に野崎意登七氏は『吉井川は数流あり、現在より東方の五明・四谷・川口辺りの流れが主、天正年間（1573～1593 年）に現状となり、底は砂地**』と報告しています。**岡山市東区長沼円定寺貝塚で発見された貝殻成長線分析とその年代『中世から近世に属する可能性が高い**ものと判断』から、**天正 19 年(1591)説が正しい**と考えます。

13.2　備前西大寺の門前市場

備前西大寺の現在地に、1458 年より古い記録がありません。備前西大寺の古文書は 1322 年と 1467～1470 年です。**現在地への移転時期は、室町時代の 1430 ～1458 年**と考えます。『吉備温故秘録』収録の成光寺と清平寺の古文書には、移転前の古文書が含まれます。**成光寺は高島国府に地名が残り、一日市にも成光寺の地名**（西小路・西光寺)**が残り、これは備前国府の高島から福岡への移転時に、成光寺も福岡国府へ移転しました。**出宮徳尚氏は戦国時代の国府移転と説明されます。

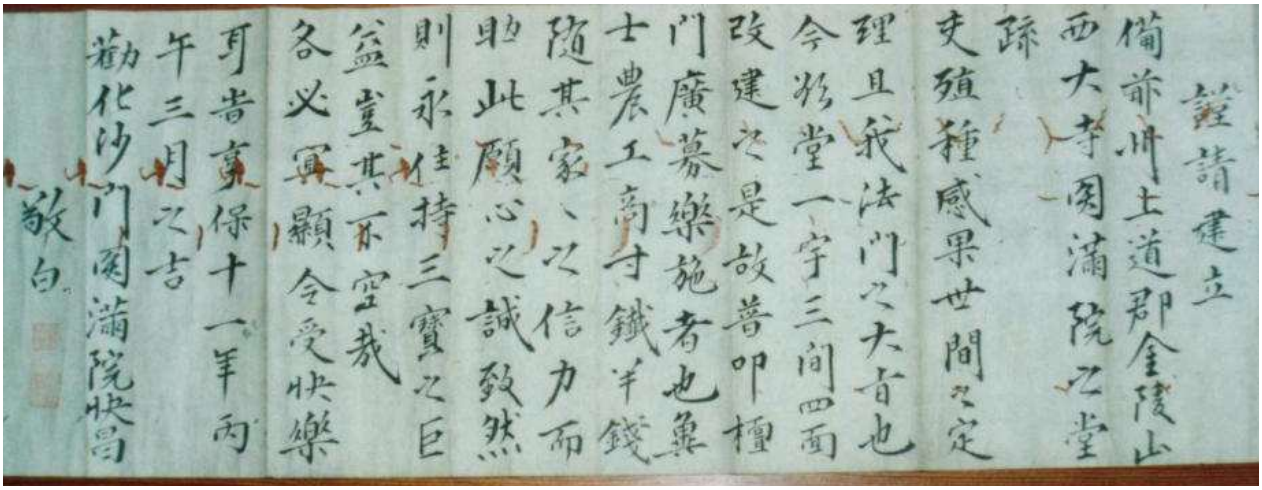
そして**西大寺に移転後に成光寺は円満院と名前を変えました。**

成光寺と清(平）寺の字名が高島に残っています。

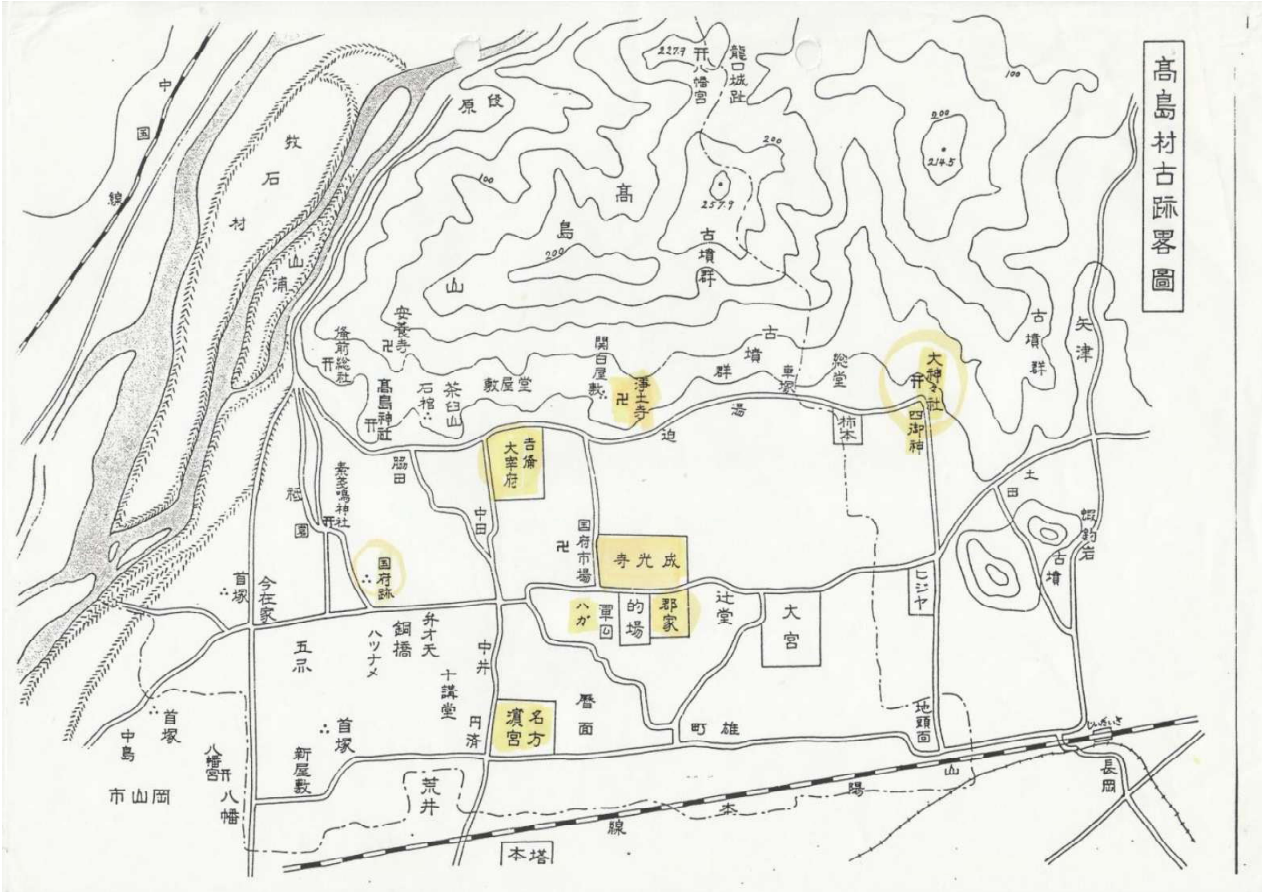
『吉備温故秘録』には「西大寺寺中、円満院所蔵・円満院・古号成光寺」と区分され、岡山県古文書集（備前西大寺文書）の 1351～1523 年の成光寺文書が円満院文書として収録されています。

清平寺文書は 1322～1557 年です。観音坊が安永 7 年（1710）に金陵山西大寺と寺名変更が寺社奉行に認可されました。（撮要録）

高島国府にあった成光寺が、『上道町史』P78 に「一日市にも・・・西小路(西光寺とも)と呼ばれる小路を中心に形成された小集落も存在する。」とあり、西小路(西光寺)とは成光寺です。松中島への移転ではなくて松中島方向への移転でした。吉井の隣の入江が一日市です。吉井川の土手の出来る前は、吉井・一日市が備前福岡市の中心地でした。


謹請建立
備前州上道郡金陵山
西大寺閑蒲院之堂
跡
吏殖種感果世間之定
理且我法門之大旨也
今形堂一宇三間四面
改建之是故普叩檀
門廣募樂施者也集
士農工商寸鐵半錢
隨其家々之信力而
助此願心之誠致然
則永主持三寶之巨
益豈其不空哉
各必冥顯令受快樂
可者寛保十一年丙
午三月之吉
勧化沙門閑蒲院快昌
敬白

備前福岡国府を最初に報告したのは、安栄七年(1778)成立の土肥典膳経平の『寸簸之塵』です。「鎌倉将軍の頃より、国府市場村の国府すたれて邑久郡福岡へうつりける」とあり、高島国府からの成光寺の松中島への移転、移転地調査が備前福岡国府説の補説となりました。『高島村史』吉備高島聖蹟顕彰会の**高島村古跡略図に成光寺**があり、p33 の小字名、**国府市場に成光寺、清寺、圓蔵寺**が有り、全ての寺院が西大寺へ移転しています。**清寺が移転後に清平寺と名前を変えたのか、清寺が校正ミスか**です。



14　まとめ

八幡山城（金山）の初見は享保 2 年（1717）の『陰徳太平記』です。

『陰徳太平記』と『備前軍記』との正確度を比較しましょう。

『陰徳太平記』1717 年　1507～1598 年までの約 90 年間の記録。1990 年　山陽新聞社
『備前軍記』　1774 年　1441～1603 年までの約 160 年間の記録。1986 ・ 2022 年　同

単純に比較しても、**『陰徳太平記』が 57 年も早い記録であり正確と推定**できます。藩主吉川氏と宗家毛利氏からの視点です。『備前軍記』の岡山藩士の視点とは異なります。**『備前軍記』には八幡山城の記録がありません。**

備前八幡山城主の記録を『信長公記』から発見しました。植木成行氏の備前西大寺の中世史研究者としての最大の功績ですが、**直家と織田信長との天正六年戊寅（1578）の和睦については、伊原仙太郎氏が昭和 46 年（1971）の『西大寺町誌』で、**「こうして**天正 7 年（1579）には直家は羽柴秀吉の斡旋によって、甥の基家を使いとして織田信長の嫡子信忠へ送り、信長へ忠誠を誓った。**」とあります。**天正 7 年（1579）は校正ミスか。『信長公記』からの創作でしょうか。参考文献名がわかりません。**

戦国時代の福岡市、備前西大寺の門前市場については、吉井川の流路変更 天正 19 年(1591)が重要で、有力商人達が福岡の市の再建を諦めて備前西大寺へ移転し、岡山市へ移転しました。岡將男氏(元岡山城築城 400 年ソフト事業委員長)の指摘、「岡山に西大寺町があるし。福岡からは上之町、中之町、下之町を誘致したし、片上町もある。経済的にはヤッパリ福岡の市が最大だろう。」と指摘されますが、**史実は吉井川の流路変更により備前福岡が壊滅的な被害を受けての移転なのです。**

岡將男氏(岡山城築城 400 年ソフト事業委員長)は、「宇喜多忠家の子が、坂崎出羽守で千姫を大阪城から助けたが、嫌われて自害したと歌舞伎にもなっているね。あの坂崎出羽守のお父さんが、西大寺城主だったというわけだ。小説一本書けるねえ。」と。**このような発想が西大寺の町興しにほしいですね。**

岡将男氏は、「なるほどな、この時期は既に直家は岡山城にいるが、毛利と織田との間で迷っていた時期だから、まず忠家を織田に近付けたのだろうな。毛利と揉めたら、勝手に忠家が織田に付いたと言えばいいからな。高等テクニックだよ。」と。結論が出たようですね。

八幡山城は、私の住む金山団地の裏山です。岡山学芸館高校に**「宇喜多と金山八幡山城」の説明表示が無く、西大寺小学校にも説明表示がありません。**「陰徳太平記」や『信長公記』を基礎とした『西大寺町誌』が読まれません。だから、岡山市の観光化構想、**宇喜多築城物語に、西大寺の八幡山城が見えません。参考文献名は報告書の初歩の初歩です。『信長公記』の記録を発見し、最初に森健太郎校長に報告した理由です。**

10 月 21 日の西大寺を愛する会の宇喜多一族散策コースに、八幡山城は入っていませんでしたが新庄山城で説明しました。備前西大寺の住人が八幡山城を知りません。

15　謝辞

私が金山に注目したのは、平成 25 年 9 月です。岡山市電子町内会の西大寺学区電子町内会・西大寺電町ブログ内に**『金山団地町内会ホームページ』**を立ち上げました。『金山団地町内会の紹介として、丸谷憲二さんのページ』をリンクしました。2 年交代の町内会長でした。町内会の紹介（e-okayamacity.jp）　**金山とは⇒『備前西大寺地名考　金山の考察』をご訪問下さい。と。**

岡山大学付属図書館古文献ギャラリーの説明と**『信長記』国指定重要文化財**の発見は**杉山一雄氏（岡山県立記録資料館館長）**の御蔭です。**出宮徳尚氏（古代吉備国を語る会）**の

考古学からの研究と教示に感謝します。**岡将男氏(岡山城築城 400 年ソフト事業委員長)に纏めていただきました。**平成 25 年より多くの研究者にご指導いただきました。

16　参考文献

『備前西大寺地名考　金山の考察』丸谷憲二　金山団地 HP　平成 25 年 9 月 20 日
『亀山城跡しおり』亀山城跡保存会　2015 年
『岡山市東区周辺の城跡について』伊達教夫　令和 4 年 3 月 19 日　西大寺を愛する会
『西大寺と宇喜多氏』沼田頼輔　山陽新報　明治 43 年（1910）2 月 9 日～14 日迄 5 回連載
『西大寺と宇喜多氏』雀洞　池上惇之編　平成 9 年
「明応五年備前国金岡県西大寺化縁疏并序の成立」苅米一志　『年報赤松氏研究　第 3 号』赤松氏研究会　2010 年　p17～p49
『通俗日本全史　十四巻　陰徳太平記下　巻第 53』香川宣阿　早稲田大学編集部　大正 2 年　p191～p196
『上道郡誌』臨川書店　大正 11 年（1922）p12
『西大寺町誌』伊原仙太郎　西大寺町誌刊行会　昭和 46 年（1971）p29～p30 ・ p295p296
『西大寺の城跡』西大寺愛郷会　昭和 49 年(1974)　p52p53
『上道郡町史』岡崎誠　昭和 48 年　岡山市役所　p124～p133p
『寸簸之塵』土肥典膳経平『吉備群書集成（一）』昭和 45 年　歴史図書社 P371～373
『新釈陰徳太平記』三好基之　山陽新聞社　平成 2 年　p107～p113
『宇喜多直家は奸雄にあらず』植木成行「西大寺臨時特別号」西大寺愛郷会　平成 11 年 p68～p85
「改訂」『宇喜多直家は奸雄にあらず　直家と浦上政宗・宗景の歴史』植木成行
宇喜多史談会会報第 17 号（平成 18 年 2 月）
『訳注 信長公記』太田牛一（著），坂口善保(訳注）武蔵野書院　2018 年　p220p221
『信長公記-戦国覇者の一級史料-』和田裕弘　中央公論新社　2018 年　p3～p14
『信長記』岡山大学付属図書館　古文献ギャラリー（okayama-u.ac.jp）
『戦国大名・宇喜多直家の地場からの検証･･･梟雄の再評価･･･』出宮徳尚
平成 28 年（2016）年 10 月の瀬戸内市中央公民館 キラリ★市民講座
『宇喜多氏の城々（三)乙子城　乙子城主　宇喜多直家考』出宮徳尚
宇喜多史談会 14 ・ 15 合併号　平成 17 年 7 月
『宇喜多氏の城々(四)　奈良部城　-その存否の検討-』出宮徳尚
宇喜多史談会 17 号　平成 18 年 2 月
宇喜多家史談会会報（kouchinji.net）
宇喜多直家と城 - 岡山県ホームページ（pref.okayama.jp）
『新釈 備前軍記』柴田一　山陽新聞社 1986 年
『現代語訳　備前軍記』土肥経平・柴田一（編）・内池英樹（監修）山陽新聞社　2022
『中世吉井川の流路変遷時期の明確化』丸谷憲二　令和 5 年 1 月 21 日　西大寺を愛する会
『西大寺普門院「開かずの箱」報告　備前西大寺の地名の由来』　丸谷憲二　令和 4 年 1 月 15 日　西大寺を愛する会
『岡山市の地名　資料編　岡山市の小字名』角川書店　1989 年　p8 p21
『高島村史』吉備高島聖蹟顕彰会　昭和 12 年
TOP｜宇喜多直家公の足跡を巡る（e-setouchi.info）